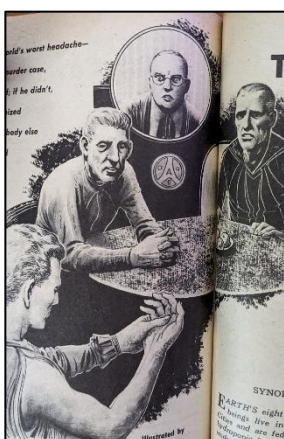
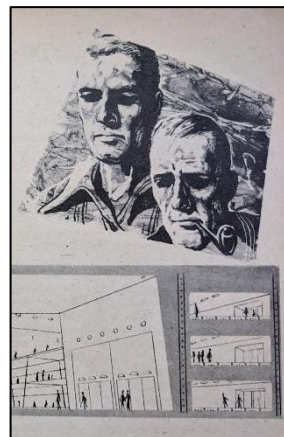


【ネタバレあらずじ】

- 1章 ニューヨーク・シティのC-5級私服刑事イライジャ・ベイリは、警視總監ジュリアス・エンダービーに呼び出され、3日前に起きた宇宙人（スパーサー）殺人事件の捜査を命じられる。シティ近くの宇宙市（スペース・タウン）でロイ・ネメヌウ・サートン博士が殺されたのだ。ベイリは宇宙人の人間型ロボット、R・ダニール・オリヴォーと組んで事件の捜査に当たることになる。ダニールはサートン博士そっくりに造られていた。
- 2章 宇宙市は25年前に建設され、ニューヨーク・シティとの境に電磁波の障壁を設け、地球人を隔離した。地球人には激しい不満が生じ、暴動が起きた。その後、障壁は撤去されたが、殺人をきっかけに元に戻るかもしれないとベイリは考える。地球には科学的に建設された800以上のシティがあり、80億の人間が居住している。イースト菌工場と水耕農園が食料を供給し、高速自動走路がシティ内に張り巡らされている。
- 3章 ベイリとダニールは靴屋で反ロボット暴動に遭遇する。ダニールは陳列ケースの上に乗れ、熱線銃を構えて人間を威圧し、暴動を鎮圧する。
- 4章 ベイリと妻との出会いが語られる。妻ジェシイのフルネームはジェゼベルであり、聖書では預言者イライジャ（エリヤ）は王妃ジェゼベル（イゼベル）の仇敵であった。始めは面白がっていたジェシイだが、聖書を読みジェゼベルの所業を不快に思う。子供には聖書に出てこない名前をつけたいと言い、ベントリイと名づける（16歳）。ベイリはダニールを自宅へ連れてきて、家族に紹介する。
- 5章 ダニールがサートン博士の思想を語る。ロボット学専攻の社会学者であったサートンは、宇宙人は地球人と交わり、一体化すべきと考えていた。人間とロボットが対等に結合された文化＝C/Fe文化を唱えたため、地球の懐古主義者がサートンを殺したのではないかとダニールは推理する。広所恐怖があるためシティの外に地球人が出ることは考えられないとベイリは言う。ジェシイが帰宅し、ダニールがロボットであることを見破る。
- 6章 なぜわかったのかと問うベイリに、宇宙人のロボットがシティに入ったという噂を聞いたためだと答えるジェシイ。ジェシイは暴動により自分たちが殺されることを心配していた。
- 7章 ベイリはダニールとともに宇宙市に入り、宇宙市側での事件担当責任者ハン・ファストルフ博士との会談を行う。エンダービー總監は立体テレビで参加し、ベイリは、殺人は起きておらず、ダニールこそサートン博士であると指摘する。【連載第一回はここで終了】
- 8章 理由1：ダニールがあまりに人間くさく、不要な部分まで人間に似せて作られている。理由2：人間を熱線銃で脅した。理由3：正義に対する欲求を注入されたと言うが、正義の概念を用いるのは人間だけだ。理由4：昨晚自宅を抜け出し共同浴場へ行った。反論：2はこれによって人間を危害から守ったことになり、三原則1条に反していない。3はダニールが「正義は法の定めるところにある」と定義していることから妥当性があり、4は盗聴器を探しに行っただけだった。納得しないベイリに対して、ダニールは自分の腕の内部を見せる。
- 9章 衝撃を受け降格を覚悟したベイリだが、ファストルフ博士はベイリの任務継続を望む。ベイリの態度に明るい希望を見出したのだ。宇宙国家は無菌社会であり、宇宙人がシティに入らないのは軽蔑からではなく、病気を恐れるためだと博士は語る。宇宙人は長寿であり、産児制限によってロボットとの人口比を厳格に守っている。安定ゆえに頽廃と退化が生まれ滅亡していくだろう。博士は、地球にロボットを導入し、過剰な人員を宇宙へ進出させることで、地球と宇宙国家が統合された新植民地を建設し、滅亡を防ぐことができると考えていた。
- 10章 サートン博士の死体発見者であるエンダービーは、直後に脳分析を受けており、殺害の可能性はないとされていた。ベイリとオニールはシティに戻る。エンダービーはシティを調査したが、ロボットの噂は存在しなかった。ベイリとダニールは食堂へ行き、食事をする。そこには靴屋の暴動に居合わせた人物が6人いた。



11章 ベイリらは食堂を出て走路とびを行い、追跡者を振り切る。原子力発電所を通り、下級者用アパートに着く。そこにベントリイが父を探しに来る。母に父ベイリを探すよう言われて、役所で父の居場所を聞いたという。

12章 翌日、ベイリは地球のロボット学者ジェリゲル博士に会う。博士は広所恐怖症で、飛行機に乗らずにワシントンから高速走路で来たという。博士によれば、ロボット三原則第一条に反するロボットを作るには50年かかるため、殺人事件の犯人がロボットである可能性は低い。また、ロボットが人間型をとる理由は経済的で実用的だからだと述べる。ダニールがロボットと知り、ジェリゲルは驚く。サートン博士を殺した熱線銃が見つかっておらず、ベイリはダニールが胃の中に隠したのだと言う。

13章 ジェリゲル博士はダニールに対して簡単な検査を行い、三原則第一条は守られていると結論づける。靴屋で人間を脅した熱線銃は充電されていなかった。ロボット導入のため解雇されたヴィンスが警察を訪れる。同僚のフィリップは、ロボットは地球に必要なと説き、太陽光発電によりエネルギーが無限に得られるという。ベイリは反論し、過剰人口を移住させるほうがよいと主張する。ダニールは、自分は人間の脳波を分析し心理を調べるためのロボットであり、昨夜以来ベイリに明確な変化があると言う。続けて、ダニールはジェシイが地下組織の一員ではないかと述べる。そうでなければ自身でベイリを探しに来るはずだ。そこへジェシイがやって来る。
【連載第二回はここで終了】

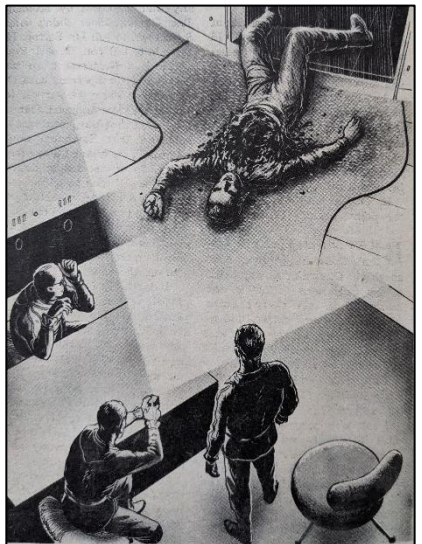
14章 ジェシイは自ら地下組織の一員であったことを告白する。聖書のジェゼベルが新来者の生き方に対して保守的な姿勢を示したのと同様に、自分も宇宙人の新しい様式に対して闘おうとしたのだと。しかし、家族に害が及ぶかもしれないと思うと怖くなって、告白しに来たのだった。組織のリーダーの名前を言い、家に帰されるジェシイ。ベイリとダニールは彼女が嘘をついていないと判断した。ベイリはダニールに聖書の言葉を紹介する。「お前たちのなかに罪のない者がいたら、まずその人間が女に石を投げるがいい」(略)「行くがよい。二度と罪を犯すな」

15章 ジェシイの告白からイースト・タウンのフランシス・クロウサーが浮かび上がり、ベイリ達は彼を訪ねる。クロウサーは自らを発酵学者と呼び、ダニールをロボットと知っていた。土に帰れという懐古主義者フランシスの主張に対し、ベイリは「なぜ前進しないのだ」「ほかの惑星の土に帰るんだ」と反論する。旧地球、旧宇宙国家のどちらとも異なった、新しい中道の形成に作用するのだ、と。そして、人間とロボットの違いについて熱く語る。「人間の人間としての能力を持ったロボットを造ることはできないのだ」「審美感とか、倫理感とか、信仰心を備えたロボットも造れない」。そこへダニールが来て、R・サミイが破壊されたことを告げる。

16章 ベイリはフランシスを署へ連行し、その後、自分がR・サミイ事件の容疑者になったことを知る。サミイは原子力発電所にあったアルファ線噴射器によって破壊されており、ベイリは日頃からサミイを憎く思っていた。さらに、サミイは今日ジェシイが署に来たのを見ており、ベイリは口封じのためにサミイを破壊する動機を持っていた。ベイリは自分でこの嫌疑を晴らさねばならない。ダニールは、宇宙市がサートン博士殺人の捜査を打ち切り、地球から撤退する決定をしたことを告げる。

17章 宇宙市は、地球が宇宙に出て新たな植民を始めることの確信を得たため、引き上げることとした。ベイリは地球の過去に過剰なロマンチズムを抱かず、現代のシティ文化をかたくなに守ることもしない現実的な人間であり、宇宙市は、薬品の力も借りて、ベイリに宇宙植民こそが解決だと信じ込ませることができた。実は懐古主義者は開拓への渴望を内在しており、宇宙市が撤退することによって、地球人は自ら再び宇宙へ出ていくようになるだろう、と宇宙人は考えたのだ。捜査終了まで残り一時間半、期限が迫る中でベイリはついに事件の真相に辿り着く。

18章 エンダービー総監は、ジェゼベルが懐古主義者の一員だったことをフランシスから聞いたとベイリに言う。しかし、ジェゼベルはフランシスに本名を告げていない。エンダービーは自身も懐古主義者であったため、そのことを知っていたのだ。エンダービーはダニールがロボットであることを懐古主義者に知らせ、靴屋事件も故意に計画されたものだった。【5日前、エンダービーはサミイに熱線銃を持たせて宇宙市へ行かせ、ドームで銃を受け取ったあと、眼鏡を拭こうとして落としてしまった。



目がよく見えなくなったエンダービイは、ダニールを撃つつもりで、サートン博士を撃ち、そのことに気づかなかった。】これが事件の真相であった。従って、エンダービイは殺人を犯したとは思っておらず、ダニールの心理分析をパスしたのだ。ベイリは殺害現場の映像を映し出し、眼鏡の欠片を見つけ出す。ベイリはエンダービイに、懐古主義者を宇宙植民に動かすために力を貸すなら、裁くことはしないと告げる。協力を約束するエンダービイ。ダニールが最後に告げる。「行け、二度と罪を犯すな！」と。

作者による『鋼鉄都市』誕生秘話

（1952年）4月19日にはホーレス・ゴールドを訪ねたが、『宇宙気流』がキャンベルにまわると聞いて、次の長編は自分にくれといった。彼はロボットものの長編を提案したが、私は反対した。ロボットものは短編しか書いていなかったし、ロボットのアイデアで長編が書きとおせるかどうか、わからなかったのである。

「できるとも」と彼はいった。「人口過剰の世界で、ロボットが人間の代りに仕事をする、というのはどうだね」

「暗すぎる」と私はいった。「まじめな社会学的な小説を書く自信はないんだ」

「好きなように書け。きみはミステリが好きだ。そういう社会で殺人がおこり、刑事がロボットの相棒と事件を解決する。刑事が解決できなければ、ロボットが彼に取って代ることになるんだ」

これが、『鋼鉄都市』という新しい長編の発端だった。

これを書いたときには、ロボットが人間にとって代るという件を無視すべく、最善をつくした。これは典型的なゴールド流であり、アシモフ流とは縁もゆかりもなかったのだ——だが、ホーレスは固執しつづけ、しまいには何らかの形で入れざるをえなくなったが、それはホーレスの要求とは似ても似つかぬものになった。

『鋼鉄都市』を書くことになって、いちばん嬉しかったのは、SF的な世界を背景にした純然たる殺人推理小説だということだった。私にいわせれば、これは二つのジャンルの完璧な融合であり、これだけの完璧な融合は、当時までなかった。この点では、多数の人が私に同意している。（『アシモフ自伝Ⅰ下巻』366頁／山高昭・訳／早川書房より）

ヨシャパテについて

ベイリの台詞によく出てくる間投詞にヨシャパテJehoshaphatがある。紀元前9世紀のユダ王国の王の名で、「主はさばきたもうた」の意を持つ。作中ではそれほど深い意味はなく、Oh, my godの代りに使われているような感じ。イライジャ（預言者エリヤ）の名とともに、ベイリがユダヤ系であることを示している。『鋼鉄都市』より先に訳された『裸の太陽』（都筑道夫訳）では「なんてことだ」「やれやれ」などとなっていた。『鋼鉄都市』でも「なんてことだ」が踏襲され、その後の『はだかの太陽』（冬川亘訳、小尾芙佐訳）でも「なんてこった」「いやはや」などと訳されている。ルビがつくようになったのは1984年の冬川訳『はだかの太陽』からなので、実は『鋼鉄都市』ではどこでヨシャパテが使われているか、すぐにはわからない。探してみるのも一興かも。

最後の一文

雑誌掲載版では、Baley, smiling, took R. Daneel's elbow and they walked out the door, fleshly arm in robotic arm.となっており、人間の腕とロボットの腕の対比が際立っています。人とロボットの融和を象徴する見事なラストでしょう。福島訳「二人は腕を組んで、ドアの外へ歩み去った」ももちろん間違いではないのですが、形容詞が消えてしまっているので、少し物足りないような気もしますね。

アイザック・アシモフ ロボットもの長編リスト

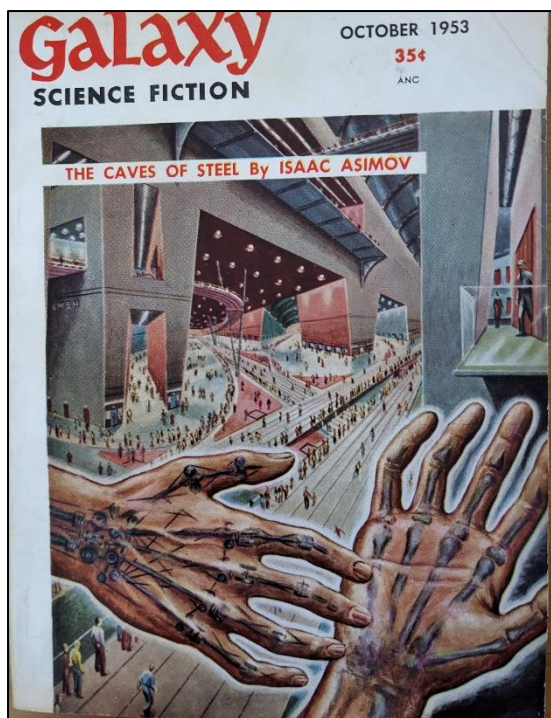
- 1 ● 『鋼鉄都市』（1954）福島正実訳／早川書房（1959）→ハヤカワ文庫SF（1979）→新版（2011）電子書籍○
 - 2 ● 『はだかの太陽〔新訳版〕』（1957）小尾芙佐訳／ハヤカワ文庫SF（2015）電子書籍○
 - 3 ● 『夜明けのロボット』（1983）小尾芙佐訳／早川書房（1985）→ハヤカワ文庫SF（1994）電子書籍×
 - 4 ● 『ロボットと帝国』（1985）小尾芙佐訳／早川書房（1988）→ハヤカワ文庫SF（1998）電子書籍×
- ※ベイリとダニールが登場する短編「ミラー・イメージ」は『SFミステリ傑作選』（講談社文庫／1981年）か『コンプリート・ロボット』（ソニー・ミュージック／2004年）で読むことができます。

現在入手可能なSFミステリ9選

※翻訳ミステリ読書会「私たちが知らないSFミステリの世界」Youtube配信より

名古屋SF読書会から渡辺英樹・睦夫・るりさんが出演して紹介していますので、ぜひ見てみてください。

- 1 『破壊された男』アルフレッド・ベスター／ハヤカワ文庫SF ※エスパーが活躍する未来社会で起きる殺人事件
- 2 「月の蛾」（『奇跡なす者たち』）ジャック・ヴァンス／国書刊行会 ※異星の仮面世界で凶悪犯を追う
- 3 『鋼鉄都市』アイザック・アシモフ／ハヤカワ文庫SF
- 4 『星を継ぐもの』ジェイムズ・P・ホーガン／創元SF文庫 ※月面で五万年前の人間の死体が発見される
- 5 『双生児』クリストファー・ブリスト／ハヤカワ文庫FT ※二つの世界のどちらが本当なのか
- 6 『タイタン・ノワール』ニック・ハーカウェイ／ハヤカワ文庫SF ※近未来ハードボイルドの新機軸
- 7 『ジャック・グラス伝』アダム・ロバーツ／新☆ハヤカワ・SF・シリーズ ※宇宙的殺人者を巡り奇想が炸裂
- 8 「そして(Nマイナス1)人しかいなかった」（『いずれすべては海の中に』）サラ・ピンスカー／竹書房文庫
- 9 『六つの航跡』ムア・ラファティ／創元SF文庫 ※冷凍睡眠から目覚めると自分の死体が目の前に



Galaxy1953年10月号表紙

名古屋 SF 読書会

初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。

<https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【今までの課題本】

- 1 2014・11・22/ル・グイン『闇の左手』
- 2 2015・2・15/バスター『虎よ、虎よ!』
- 3 2015・7・26/ブラッドベリ『華氏451度』
- 4 2016・1・23/イーガン『ゼンデギ』
- 5 2016・4・29/ハインライン『宇宙の戦士』
- 6 2016・7・30/ベイリー『カエアンの聖衣』
- 7 2016・11・23/レム『ソラリス』
- 8 2017・4・30/ノース『ハリー・オーガスト、15回目の人生』
- 9 2017・8・5/ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』
- 10 2017・12・2/伊藤計劃『ハーモニー』
- 11 2018・4・29/オールディス『地球の長い午後』
- 12 2018・7・21/小松左京『日本沈没』
- 13 2018・12・22/ウィンダム『トリフィド時代』
- 14 2019・4・27/山田正紀『宝石泥棒』
- 15 2019・8・3/クラーク『2001年宇宙の旅』
- 16 2019・12・22/劉慈欣『三体』
- 17 2021・10・3/劉慈欣『三体Ⅲ』(オンライン)
- 18 2024・6・30/飛浩隆『グラン・ヴァカンス』
- 19 2024・10・6/ウィアー『プロジェクト・ヘイル・メアリー』
- 20 2025・3・8/アシモフ『鋼鉄都市』

スタッフ&ゲスト紹介

名古屋SF読書会は初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。今後ともよろしくお願いいたします。(文責・渡辺英)

長澤唯史 @Sonopapa

相山女学園大学教授。著作に『70年代ロックとアメリカの風景』(小鳥遊書房/2021年)。今回は残念ながら欠席です。

舞狂小鬼(洞谷)

SF、幻想小説、海外文学など何でも読みこなす読書家。作家ではレムとストルガツキー兄弟とバラードと泉鏡花が好き。ブログ「お気らく活字生活」継続中。

渡辺英樹 @gonza63

SFマガジン4月号(最新号)SF少女マンガ特集でブックガイドを6本書きました。今の夢はSF資料館設立です。

渡辺睦夫

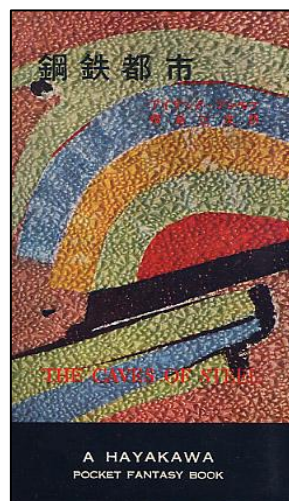
海外SFファン。好きな作家はC・スミス、J・ティプトリー・Jr.、B・ベイリー、M・コーニイなど。洋楽ファン。好きなジャンルはパワー・ポップ、オルタナ・カントリーなど。

渡辺啓一 @eleking

大学時代にSF研に在籍して基本を学び、あとはのんびりSFと付き合っています。

中村融/なかむらとおる(翻訳家)

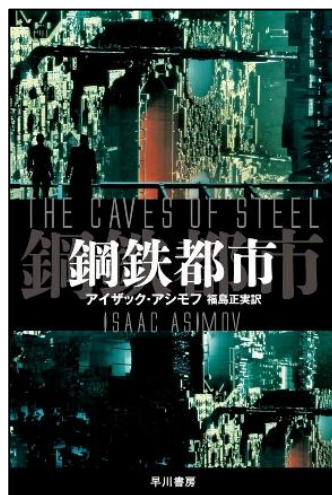
中央大学在学中より海外SFの研究、評論、翻訳など幅広い活動を行う。1987年にジャック・ヴァンスの「五つの月が昇るとき」で翻訳家としてプロデビュー。以降、新作の翻訳紹介、古典の新訳、SF/ファンタジーのアンソロジー編集など、多方面で活躍中。



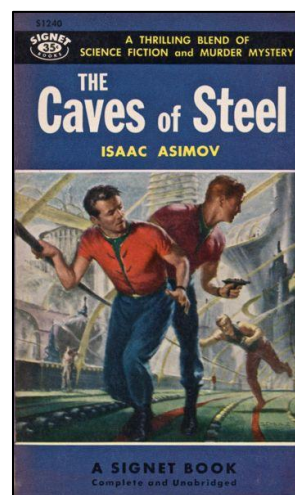
1959年ハヤカワ・ファンタジイ



1979年ハヤカワ文庫SF



2011年ハヤカワ文庫SF



1955年シグネット版